灼熱の国

リヤドは三月に入ると熱くなり始める。空中に熱気がみなぎって、時折、沙漠からの強い風が、空が曇るほどの大量の砂をリヤドの中心部まで運んでくる。そして、中旬から下旬には一気に熱くなり灼熱の国と化す。

慎太郎は、熱さは嫌いではなかった。子供の時から夏が好きで、リゾートでの熱い陽射しはいつまでも頭のどこかに残っていた。どこまでも青い空、それに水平線に沈む大きな太陽も好きだった。前回赴任時も、長期休暇は大体海外のリゾートで過ごした。エーゲ海クルーズ、コートダジュール・ニースの眩しい陽射し、マヨルカ島の夕焼け、そしてアジアではペナン島の燦燦と降り注ぐ太陽は忘れられなかった。

三月中旬の気温は未だ朝方で二十度程度、最も熱い昼でも三〇度台半ば程だった。湿度も急速に低くなってきたこともあり、日本の湿度の高い熱帯夜よりはかなり過ごしやすかっ

た。

リヤドに赴任した林は、早速、慎太郎を日本レストランに招きたいと言ってきた。慎太郎は、林の歓迎会にしたいと言ったが、林は譲らなかった。慎太郎は、林の性格を良く知っていたし、また、大使館の次席となった林が高級外交官らしくふるまいたいのだろうと思い甘えることにした。

イシャーのお祈りの時間が過ぎた午後八時過ぎに、慎太郎は林をレジデンスの受付ロビーで待っていた。

レセプションには、シリア人のアブダラーとレバノン人のハリリがいた。二人とも慎太郎のことを気に入っていた。慎太郎を見かけると、にこやかにミスター・イケナミ、こんばんはと声を掛けて来た。慎太郎が、それに応えて挨拶をすると、風貌がおじさん風のアブダラーが聞いた。

「ミスター・イケナミ、アラビア語で“こんばんは”はどういうか知っているか」

慎太郎が、とぼけて知らないと言うと、アブダラーは得意げに身をそらして、

「マーサ・ルヘイルだよ」
と教えてくれた。
「マーサ・ルヘイル」
慎太郎が、早速、繰り返すと、アブダラーはその慎太郎のぎこちない挨拶に微笑ながら、今度は、
「返事は、マーサ・ヌールと言うんだよ」
とこれまた得意満面で教えてくれた。
「マーサ・ヌール」
慎太郎は、再び、直ぐに繰り返した。
黒い燕尾服に身を包んだアブダラーは、やはり身をそらしながら親指を立ててグッドと嬉しそうに言った。

アブダラーは前にシェラトン・ホテルのバトラーをしていたことがあるとかで、彼だけは、そこで使っていた燕尾服を誇りにして、いつもそれを着込んでいた。
レジデンスの受付は、トーブ姿、燕尾服姿、そして、アル・ファイサリア・グループの制服姿とバラエティ豊かだった。
慎太郎は、まさしくツバメの尾のように割れた裾をひらひ

らさせながら、動き回るアブダラーの姿をいつも愉快に眺めていた。それが、場違いに見える時もあったが、本人は至って真面目で優越感に浸っているようだった。

慎太郎は、林が運転手付きの大使館の公用車で迎えに来るものと思って、ロビーのソファーに身を沈めて待っていたが、時間になると外交官プレートを付けたシルバーメタリックに輝く高級外車サーブ９―５セダンがエントランスに静かに入って来てレジデンスの玄関前にピタリと止まった。

そして、車の運転席のドアが開き、中から林が出てきた。

慎太郎は、赴任間もない林が自家用車を運転して来たことに驚かされたが、天真爛漫で気取らない彼の性格からすれば、この辺りも林らしいところかも知れないと思い直した。また、彼は、アラブ諸国での勤務も多かったし、外交官用の青いナンバープレートを付けた車は例え事故を起こしてもすぐには捕まらないという安心感があったのだろう。

アブダラーが青い外交官プレートを見て、飛んできて、

「グッドイブニング、サー。宜しければ、鍵をお預かりして、適当なところに止めておきますが・・」

と言った。

林は、その申し出に礼を言うと、すぐ出るからと丁重にアブダラーを制し慎太郎に話しかけた。

「やあ、ひさしぶり。元気そうだね」

林は慎太郎と固い握手をした。外交官と親しく話をする慎太郎を見てアブダラーの慎太郎を見る目が変わっていた。

「君も元気そうだね。なによりだ」

慎太郎は、固い握手を離そうとせずに話した。

「積もる話はレストランでということで、それでは、僕の車に乗ってくれ」

林はそういうと助手席のドアを開け、慎太郎を乗せた。そして、運転席に腰を沈めエンジンを掛けると、慎太郎に話しかけた。

「今日は、大使館で聞いて評判の良い日本料理のレストランに連れてゆくことにした。“将軍”という名前だけど、君

はもう半年近くいるのだから行ったことがあるんじゃないかと思うけど・・」

「生憎行ったことがないね。勿論、名前は聞いたことがある。ラディソン・ホテルの中にある超高級レストランだよね。とに角、最初は多忙だったし、そもそも僕は日本料理が恋しくなるタイプではないので日本レストランにはあまり行ったことがないんだ」、

「それに、支店の連中と行く時には、そんな高級なところには行けないよ。有難う、そんなところに呼んでくれて。今日は楽しみだ」

慎太郎は、将軍がリヤドで最高の日本料理店であることを噂に聞いていた。そのようなところに招待されて本当に嬉しかった。しかも気の置ける友達とゆっくりと話が出来るのだから言うことはなかった。

「喜んでくれて良かった。でも、いくら高級と言ったところで、ホテル・オークラや帝国ホテルに入っている高級レストランと比べれば大したことはなさそうだがね」

と笑いながら林は応えた。

林の運転は上手だった。サウジアラビアで運転をするのは、たいそう度胸のいることだった。専門の運転手でさえ、サウジ人の運転マナーの悪さには閉口していた。口の悪い運転手は、彼等は気が狂っている、まるで駱駝を乗り回す気分で運転しているのではないかなどとののしっている。

高速運転はまるでスピード狂のようにスピードを出すし、割り込みなどは当り前だった。危険極まりない。

時折、道路脇に見せしめのためか、事故車が置かれていた。殆どペシャンコになっていて、相当のスピードで走っている時に事故を起こしたことが明白だった。恐らく事故を起こした運転手は死亡したのではなかろうかと思われた。

ラディソン・ホテルには十五分程度で着いた。ものものしいホテルの警備を通り、キーを玄関のドアマンに預けると二人は中に入っていった。玄関には、空港にあるようなＸ線の付いたゲートがあり、そこを抜けると、ようやくホテルらしい光景が広がっていた。

“将軍”は一流ホテルのレストランだったが、日本人従業

員はいなかった。日本人のように見える者もいたが、ウェイターなどは、皆、フィリピンあるいは東南アジア系の出稼ぎ労働者だった。従って、注文などはすべて英語ですることになる。

入口を入るとグリーターが出て来て、お二人ですかなどと声をかけてきた。林が八時三〇分から予約している林だがと言うと、これを聞きつけた黒いタキシードを着た恰幅の良い支配人が奥からさっと出て来た。

「日本大使館の林公使ですね。大使館さんにはいつもお世話になっております。今日はくれぐれも宜しくお願い申し上げます。どうぞ、こちらに良いお席をご用意しています」

支配人は、グリーターを差し置いて二人を奥の静かな席へと誘導した。

そして、席のところからウェイターに手で指示をしてメニューなどを持ってこさせた。

「それでは、ごゆっくりとお楽しみ下さい」

そう、にこやかに言うと、自分の役目を良く弁えた支配人は奥へと引き上げていった。

ウェイターはメニューを持ってくると、それを二人に渡しながら、

「お飲み物は何になさいますか」

と聞いた。

「僕は日本茶が良いが、君は何にする」

林は、リヤドではホテルといえどもアルコール飲料の出ないことは十分に承知していたので、注文もスムーズだった。リヤドでは美味しい日本茶の飲めるところは限られていた。

「僕も日本茶で良いよ。ノンアルコールビールなんかは却って空しいからね」

と慎太郎は応じた。

「それじゃ、日本茶を二つね」

林がウェイターに言うと、ウェイターは、

「それでは、日本茶を二つお持ちします。ごゆっくりと料理をお選び下さい」

と言って厨房の方に歩いていった。

「ここは鉄板焼きが美味しいらしいよ。和牛はないだろうけど、美味しい牛肉はあるんじゃないかな」

そう林に言われて、慎太郎はレストランを見渡し、中央辺りに鉄板焼きコーナーがあることに気が付いた。この手の和食レストランは、昔、米国で“紅花”が流行らせたもので、今や、海外の和食レストランでは定番となっている。また、この国では宗教上の理由で豚が全く食べられないが、牛は全く問題無く食べられた。総じて、安くて美味しかった。

「今日は、遠慮しないで何でも好きなものを選んでね」

林にそう言われて、慎太郎はちょっと迷ったが、

「僕は好き嫌いは無いんだけど、今日は、よければ鮨を食べたいね。あの鮮やかな黄緑色のわさびには閉口するけど、鮨自体は、ネタも良いし、結構いけるからね」

と答えた。

「そう。本当にどうしてわさびはあんな色をしているんだろうね。まるで粘土みたいに見えるものね。でも、味は正にわさびだから不思議だよ」

林は笑いながら、そう言うと、慎太郎の迷いを感じたのか、

「それじゃ、鮨と和牛にしようか」
と林は、コースメニューの中で、双方入っているものを素早く見つけ、慎太郎にそれを勧めた。
慎太郎は高額なコースに気が引けたが林の好意を素直に受け入れることにした。

林は、お茶を持って戻ってきたウェイターにさっきのコース料理を注文すると、お茶を手に持ち、ちゃめっ気たっぷりに茶碗(ちゃわん)を差し出した。
「それでは、注文が決まったところで、乾杯でもするか。お茶で乾杯というのでは気分がでないが、まあ仕方ないか。それでは、今後宜しく」
「こちらこそ、宜しく」
嬉しい乾杯だった。

二人は積もる話が山々だった。愉快に話している内にすぐに時間が経っていった。
そして、デザートが出る頃、林は、思い出したように治安

関係の話を始めた。
「ところで、あまりそんな話をしたくはないが、ここのところ、治安状態が急に悪化して来ているようだね。新たな自爆テロの動きもあるようだし、十五日には、治安部隊とテロリストが銃撃戦を繰り広げたらしい」
「そうらしいね。でも、僕は基本的にサウジの治安能力を高く評価している方だ。その十五日も結局、治安部隊は最重要指名手配者を二人射殺したしね」
と慎太郎は言った。
「確かに、昨年一一月のコンパウンド爆破事件以来、治安当局がテロ撲滅に努力しているせいか大きなテロはなかった。まあ、今後もこの調子で行ってくれると良いんだけど・・・しかし、米大は、いろいろと情報を入手しているようで、爆弾テロについても、かなり警戒しているね。先月は、爆発物を積んだトラックが押収されたようだし気が抜けない状況だね」
林は、その後に激化することになるテロを予想するようにそう言うと、話を変えた。

「そうそう、それから、この間、石油省に挨拶に行った時に大臣の第一秘書官とも話をする機会があって、その時に君の話をしたら、興味を持ってね。今度是非君を紹介してくれと言っていた。彼の名前はハリド、そう、前の国王と同じ名前だから覚えやすいね。今度石油省に行ったら寄ってみてよ」

と慎太郎に勧めた。

林は、このような言い方をしたが、慎太郎は林が慎太郎のために尽力してくれたに違いないと思った。

恐らく、当然、慎太郎のことを知っていると思ってその秘書官に話しかけたところ、意外にも知らないと言われ慌てて慎太郎が以前に大使館に勤務していたことなど秘書官の興味を惹きそうなことを話してくれたのだろう。

そうでなければ、サウジ人の第一秘書官が慎太郎に会いたいなどと言い出す筈はない。

「有難う。それでは、今度石油省に行ったらハリド秘書官のところに寄ってみるよ」

慎太郎は、林の配慮が有り難かった。

こうして、慎太郎は、これまで会えなかった第一秘書官に

やっと会えることになった。

林との会食を終え、レジデンスに戻ると、慎太郎はイブラヒムとぱったりあった。

イブラヒムはレジデンスに新たに日本人が一人入居したようだと親切に教えてくれた。イブラヒムは、レジデンスのジムでその日本人とあったらしい。イブラヒムは慎太郎が喜ぶと思って教えてくれたのだろうが、慎太郎はあまり日本人とは付き合いたくなかったので関心はなかった。

ところが、その後、偶然、レジデンスのエレベーターの中でイブラヒムが言っていたと思われる日本人と一緒になってしまった。

お互いに意外な顔をしつつ恐る恐る日本語で挨拶をした。そして、偶然にも同じ階で降りたので、慎太郎はレジデンスの先輩らしく不承不承声をかけた。

「こちらにお住まいですか。私もこの階に住んでおりますので、宜しくお願いします。名前は池波といいます」

「こちらこそ、宜しくお願いします。私は植木と言います。まだ、住み始めたばかりで西も東も分かりませんから宜しくお願いします」

とその日本人は答えた。

植木は、初老、インテリ風、中肉中背で平凡な印象だった。

「私は、今度リヤドに本部が出来た国際石油・ガスフォーラムという国際機関の職員として赴任して来ました。ここではエネルギー全般をカバーしますが、もともとは石油業界の出身ですからサウジアラビアとは昔から縁が深いのです。石油関係にご興味があれば、いつでも、なんでも聞いて下さい」

植木はにこやかに慎太郎に話し掛けた。

慎太郎が、石油関係者と同じレジデンスの同じ階に住むことになったことを奇遇に思いながら、

「実は、誠に偶然ですが、私は三友商事で石油を扱っているのです。従って、石油業界には知っている人は沢山います。それに、今の会社に入る前に外務省に勤めていたのですが、一〇年程前、このリヤドの日本大使館勤務だった時に、石油

協会というところから来ている人と知り合いになりました。僕は政務班でしたから、あまり仕事上のお付き合いは無かったのですが、小さな公館でしたから、経済班に居た彼ともいろいろな席で一緒になりました」

と言うと、植木は、急にいきいきと目を輝かせて、慎太郎に応えた。

「そうでしたか。それは誠に奇遇です。実は、私はその石油協会に努めていたのです。私も外務省さんには大変お世話になりました。昔はインターネットがこれほど発達していませんでしたから、深夜に経済局さんにＯＰＥＣ(石油輸出国機構)総会の決議文を頂戴に上がったり、一方ならないお世話になりました」

慎太郎には、急に植木に対する親しみが沸いてきた。

「いえいえ、こちらこそお世話になったのだと思います。石油協会から来ていた彼の名前は確か橋本さんとか言っていましたが、ご存知ですか」

「橋本君ですか、もちろん、良く知っています。石油協会は、外務省や三友商事さんのように大所帯ではありませんから、

皆、良く知っています」

植木は声を弾ませながらそう答えた。

慎太郎は、そのような因縁のある人物と一緒になれたことに運命的なものを感じていた。林公使のことと言い、ここのところ、随分と嬉しいことが続いた。また、イブラヒムの他にもう一人、石油の話が出来る人物が増えたことも嬉しかった。

その後、イブラヒム、植木と三人で石油談義をすることが多くなった。長い石油業界での経験に基づいた植木の話には、イブラヒム、慎太郎ともに勉強になることが多かった。特に、ＯＰＥＣや原油価格の動向に関しては、原油の実取引に詳しい慎太郎にとっても参考になることが多かった。

話をする場所には恵まれていた。レジデンスには、無料で使える会議室もあったし、ロビーのソファでくつろいで話をすることも出来た。また、ジムにも受付の脇にくつろげるスペースがあった。そこには、幾つかの机と椅子が置いてあり、

ここも使うことが出来た。時には、レストランで夕食をとりながら話すこともあった。

三月一八日の木曜日は休日だったので、三人は昼食後、ジムの受付脇に集まり議論をした。この時は、三月一七日にＮＹＭＥＸで期近先物のＷＴＩ価格が三八・一八ドルとなりイラク戦争時に記録した三七・八三ドルを超えたことから、その背景などについて議論が盛り上がった。

「シンタロウ、とうとう昨日ニューヨークで原油価格がイラク戦争直前に記録した高値を超えたね」

イブラヒムは楽しそうに慎太郎に話しかけた。

「そうだね。驚いたよ。米国のガソリン在庫が低く、需給がタイトだと言われているけど、石油在庫全体では昨年の同じ時期を上回っているし、二〇〇〇年に比べて、それほどタイト感が強いとは言えないと思うんだけどね。それに、昨年の世界石油需給は、イラク戦争で供給が心配されたけれど、結局、日量七八六〇万バレルの石油需要に対して七九三〇万バ

レルの供給が行われて、年平均では八〇万バレルの供給超過だったと見られているんだ。おかしいよね。ところで、イブラヒムはどうしてそんなに嬉しそうなんだい」

慎太郎はイブラヒムに聞いた。

「そんなに嬉しそうに見えた。それほど嬉しい訳ではないけど、ここのところ、僕の尊敬するペキンズの言う通りになって来ているんでね。まだまだ五〇ドルにはほど遠いけど・・・」

イブラヒムはそのわけを説明した。

慎太郎は、前に、イブラヒムがペキンズのことを話していたのを思い出していた。そして、イブラヒムが五〇ドルと気軽に言うのを聞いて、諭すように言った。

「五〇ドルの前に、湾岸戦争の時に記録した四〇ドルをクリアする必要があるね。しかし、君の国インドでは原油価格が上昇すると困るんじゃないか」

そこで、植木が口を挟んできた。

「そうですね。池波さんの言う通りです。ダス・インド石油ガス相は経済に悪影響を及ぼすと憂慮していました。ＥＵ諸国のエネルギー相も同じ考えです。ＯＰＥＣも高原油価格を必ずしも歓迎はしていないようです」

植木は、インド石油ガス相を初めとする閣僚達が慎太郎の懸念を裏付ける話をしていたことを紹介した。

「植木さん、ダス・インド石油ガス相は、イブラヒムのお友達で、確かに、前にイブラヒムにそのようなことを言っていたようです」

慎太郎は、イブラヒムの方を見ながら言った。

「シンタロウ、お友達ではないよ。親しい知り合いではあるが・・・そうそう、ダス・石油ガス相は、既に一月末に今の高原油価格を憂慮していたね」

イブラヒムは、照れくさそうにそう言った。

植木は驚いてイブラヒムに聞いた。

「イブラヒムさんは、随分偉い人を知っているんですね。私

のカウンターパートは大臣秘書官です。チャギさんとか言っていましたね。ご存知ですか」

「僕は、石油ガス省の人間は誰も知りません。でも、この間、大臣とあった時には、秘書官が連絡をして来ましたから、彼でしょうか。チャギという名前ではなかったような気がしますが・・・」

イブラヒムは正直に答えた。

「秘書官は一人ではないでしょうから、イブラヒムさんの仰る通り、違う人かもしれませんね」

植木は、そう言うと話を元に戻した。

「ところで、原油価格の話に戻れば、私は常々、今は異常な状態だと思っています。池波さんが仰ったように昨年の石油供給は、結局、十分でした。現在も、そんなにタイトなようには思えません。ＯＰＥＣも昨年一一月から加盟一〇ヵ国の生産上限量を日量一〇〇万バレル引き下げて二四五〇万バレルにしていたのですが、二月一〇日に開催された第一二九回ＯＰＥＣ総会で、これを更に一〇〇万バレル引き

下げて四月から二三五〇万バレルにすることを決定しました。ＯＰＥＣは原油が余剰という認識なのでしょう。このように世界の原油需給は余剰気味なのに、ジオポリティックスによって価格が高止まっているんだと思うんですね。おかしな状況です」

この植木の見解について、イブラヒムは、前に慎太郎にも言ったピキンズの主張を繰り返した。

「ミスター・ウエキは、今は異常だと言いましたけど、ピキンズによれば、原油価格が上昇してゆくのは石油供給に多くが望めないことから当然の結果だと言うことになります。ピキンズは、日量八二〇〇万バレルの石油が消費されれば、これを上回る埋蔵量の追加は出来ないと見ているのです。石油は既にピーク生産量を過ぎつつあると言うことですね」

その時、慎太郎は、ピークオイル論について疑問を投げかけただけだったが、植木の反論は、専門家らしくより断定的なものだった。

「イブラヒムさん、私はピキンズさんという人は知りませんが、ピークオイル論については良く承知しています。私のこ

れまでの了解では、石油のピーク生産は二〇三〇年より前には来ないというものです。もちろん、それよりも前にピーク生産は来るという人もいます。しかし、それが二〇一〇年よりも前に来ると言う人は少数派です。いずれにしても、ピークオイル論が現実の市場に影響を与えるには早過ぎると思います。今は、このピークオイル論もそうですが、先行き懸念が強過ぎるのだと思っています。市場は、現在それに将来と言っても年内程度の需給状況をもとにして展開するべきだと思っています。その限りでは、世界の代表的な石油需給統計のいずれをとってみても需給がタイトとは言えないのです。それは、さっき言いました通りＯＰＥＣが減産を決定したことからも明らかでしょう。その意味で現在は異常な状況と言えるのではないでしょうか」

イブラヒムは、そのように自信を持って言われると、それ以上、ピークオイル論を展開する気にはならなかった。

しかし、イブラヒムも負けてはいない。

「ミスター・ウエキ、最近、石油開発、生産と言ったいわゆ

る上流部門だけではなく、精製販売と言ったいわゆる下流部門の余剰能力不足を問題にしている人が増えてきていますが、どうお考えになりますか」

食い下がって質問をした。

「イブラヒムさん、それは私も知っています。それでは、おっしゃった下流部門の問題について私の考え方を言わせてもらいましょう。私は、実は、そのような考え方をする人に憤慨しているのです。そのような人は、それらしい図を用意して説明をしますが、それは、だいたい一九八〇年から現在に至るまでの間の石油精製能力と石油需要量の二つを対比したものです。例えば、折線グラフを使ってこの二つを表すと石油精製能力を示す線と石油需要量を示す線との間隔が一九八〇年代、一九九〇年代、そして二〇〇〇年代と最近になればなるほど見事に狭まって来ているのが見えます。ところが、それは、当り前のことで、下流部門では、一九八〇年から始まった自由化、規制緩和、合理化の動きの中で、世界中の石油会社が競争力を高めるべく膨大だった余剰能力を徐々に削減して来た結果なのです。それは文字通り血の滲む

ような努力の連続でした。図などをもとに余剰能力不足を懸念し、十分な余剰能力を持たなければならないと主張している人は、このようなコスト削減、経営効率化、合理化に対する経営努力を考えに入れていないものと言えます。きつい言い方をすれば、経営効率化、合理化の動きに対する認識不足ということになります。経営合理化の陰で、会社を去って行った人々のことを考えると、このような考え方が蔓延(まんえん)するのが、やりきれません。これらの人々が浮ばれないのではないかと大変悔しい思いがします。余剰能力不足を高価格の要因の一つと断ずる人達に対しては、原油価格が高いことを何とか説明しようとして、とんでもないことを思いついたとしか言いようがありません。もし、余剰能力不足が経営効率化、合理化の結果であり、当然の帰結であることを承知の上で、価格吊り上げのために意識的にこの状態を利用したものがあれば言語道断です。コスト削減を極限まで行うとすれば、製油所稼働率は一〇〇%、フル稼働を意味することになります。即ち、余剰能力ゼロが理想の状態ということになりませんか。私達は、現在、このような環境下に居るわ

けですから、そのようなものとして真摯(しんし)に受け止め、適応して行く必要があるのではないでしょうか。また、石油低在庫を不安視する人もいますし、低在庫は市場の強気要因となっていますが、余剰在庫を抱えるということは、コスト増を意味するわけで、経営効率化、合理化の観点からすれば、余剰在庫ゼロが理想ということになりますね。在庫が少なくなるのは当然の帰結です」

植木の説明は、淡々としていたが、石油産業の歴史を刻んで来たものとしての迫力があった。

イブラヒムはさらに植木に反論する気にはとてもならなかった。